

幻想の魔境に

闘いの炎を!

11月26日、約2千名の学友の結集のもと、学長一協議会団交がかちとられた。その場において学長一当局の民主的仮面は徹底的にバクロされた。10・4以降、当局は⑤常駐体制をしき、強権的に「正常化」をおしすすめてきた。これに対して我々は理工家の先進的学友、院生と連帯して、市大の新たなる再生と質的転換をかちとる第一歩として、当局に学長一協議会団交を要求してきた。しかしながら当局は「正式校園を通してこい」「学生部を通じて申し込め」といった形式論議や、「全共斗の組織参加は認めない、団交は学長及び協議会メンバーの有志である(理由は団交要求側に有志参加があるため)、文科系学生は当該教授会の反対があるため除外する」といった非論理的な条件でもって我々の要求を引きのばしてきた。そしてやっと26日疑瞞的な形であれ、我々の団交要求に応じてきた。これは一部ブル新の論調や、「こんなに集まるとは思わなかった」といった思わぬ失言(本音?)にみられるようになし崩し正常化路線の完成の儀式、斗争の圧殺といった当局の意図でもって応じてきたのだ。しかしながら、当局のこのような意図は圧制的学友の怒りのまえに粉砕されつくした。民主的市大を売りものにしてきた、さっそうたるメンバーの居直り、逃げ口上、彼らの民主的仮面の下に醜悪な姿が全大衆にバクロされた。三宅[○]学生運動対策部長の「いつでも、何人の学生とも話し合う」といったいぜんとした居直り(彼らはこの団交要求の経緯や9・29団交の一方的破棄等にみられるように市大斗争始まって以来、まともに話し合いに応じてきたことは一度もなく、二枚舌でもって斗争を圧殺しつづけてきた)、ロックアウト中に、民青一秩序派諸君を支援し(ポケットまではって)収容路線にのっかった法学部[○]学生大会なるものを開催したこと、物理3回生のストライキ決議を⑤をクラスに入れて圧殺した(私服に活動家の名前をチェックさせることまでしている)こと、医学部においては、名札を強制し、学生、無給医、看護婦の闘っている部分に対する、処分、シッドパーヅ、配転といった弾圧を図っている。厚生学院生に対しては、斗争する一人一人を10数名の教官でもって部屋に監禁し、存休させるまでいじめている。我々はまさにこれらの中に、権力と一体となっている当局の姿をみてとれる。まさに渡瀬一当局は70年代へ向けての市民社会再編、大衆の帝国主義的再編を自らにない、新たなる国大協自主規制路